

○安水義寿・大藪正史¹⁾・永田茂穂²⁾・鮫島國親²⁾
 (鹿児島農総七大隅¹⁾ 鹿児島農総七大島²⁾ 鹿児島農総七)

【目的】

鹿児島県のゴボウは、年間を通じて栽培が行われているが、特に、2月から3月を中心に出荷される若掘りゴボウは、春の商材として、国産志向の高まりやサラダ感覚で食べられることもあって年々需要も増加し、高い市場評価を得ている。しかし、平均単価は、年々低下しつつあり、生産量の増大と生産コストの削減が必要である。そこで、省力・低コストの不織布資材を活用した栽培技術について検討した。

【材料および方法】

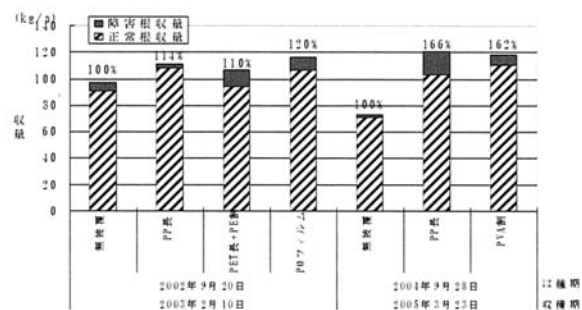
試験1:不織布資材の種類が生育収量に及ぼす影響(2002年, 2004年)。無被覆区に対する不織布資材として、2002年は、9月20日は種で、ポリプロピレン長繊維不織布(パオパオ90R, 以下PP長)、ポリエステル長繊維+ポリエチレン割繊維不織布(ひだまり, 以下PET長+PE割)及びポリオレフィン系フィルム(クリンテート, 厚さ0.05mm, 以下P0フィルム)。2004年は、9月28日は種で、PP長及びポリビニルアルコール割繊維不織布(タフベル, 以下PVA割)の区を設けた。**試験2:**不織布の被覆法が生育収量に及ぼす影響(2003年)。被覆法として浮きがけ(トンネル状に被覆), 直がけ(直に被覆)の区を設けた。**試験3:**被覆開始時期が生育収量に及ぼす影響(2005年)。は種期は9月15日, 9月27日の2回。被覆開始時期は、約20日間隔で、10月6日, 10月27日, 11月18日, 12月7日の4回と無被覆を併せて区を設けた。供試品種はいずれの試験も「山田早生」。

【結果および考察】

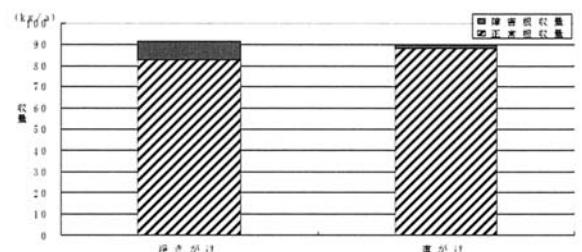
試験1:2002年は、不織布を被覆することで、POフィルムより収量は低いが、無被覆と比較すると10~14%の増収であった。2004年も同様の傾向で、無被覆より62~66%と増収し、不織布被覆の効果が認められた。また、被覆資材の種類による差は認められなかった(第1図)。**試験2:**不織布の被覆法では、浮きがけと直がけの収量は同等であった(第2図)。トンネル支柱等の資材費や労力を考慮すると直がけが有効である。**試験3:**不織布の被覆開始時期は、は種期によってその効果が異な

った。9月中旬は種では、10月上旬以降、いずれの時期の被覆開始でも増収効果が認められたが、間引き作業を考慮すると10月下旬以降の被覆が有効である。9月下旬のは種では、10月下旬までに被覆を開始することで増収効果が認められ、被覆開始時期が遅いとその効果が低かった(第3図)。

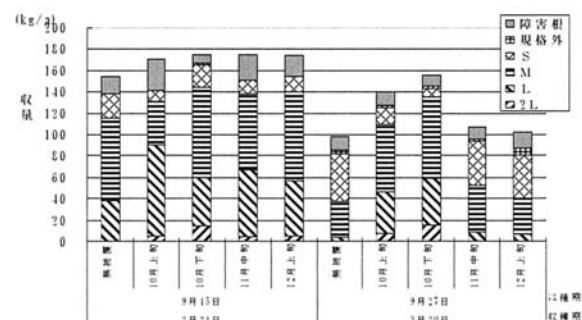
以上、秋まきの若掘りゴボウ栽培は、不織布を直がけすることで増収効果が認められ、播種期によって被覆開始時期とその効果が異なった。



第1図 被覆資材の種類と収量
 注) マルチ:黒ホ®リフィルム



第2図 被覆方法の違いと収量
 注) マルチ:黒ホ®リフィルム, 被覆資材:PP長
 は種期:9/29, 収穫期:2/16



第3図 は種期, 被覆開始時期の違いと収量
 注) マルチ:9/15は種は, 白黒ホ®リフィルム
 9/27は種は, 黒ホ®リフィルム